

Title	Prehistoric Pottery in China, by G. D. Wu (呉金鼎) London, 1938
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1940
Jtitle	史学 Vol.18, No.4 (1940. 4) ,p.221(783)- 221(783)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19400400-0222

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

那文化の世界無比なる持続性、その外來文化を攝取し之を自國化するの卓越せる技能をたゞへてをる。著者の意見はあまり突飛ならず極めて着實な意見に終始してをる。たゞ氏は日本關係の文獻を無意識か故意に無視してをるので殷文化の太平洋文化との類似を説くにもフェノロサの Epochs of Chinese and Japanese Art や東洋文庫英文紀要第一號に載せられた濱田博士の Engraved Ivory and Pottery, found in the Site of the Yin Capital に述べられた先人の同様の意見などには全く言及されてゐないのはどうかと思はれる。學者は今少し寛容であつて欲しいものである。然し本書は眞面目な勞作なので殷代の研究に當分歐米文籍中首位を占め得る良著であらう。たゞ今後氏が更に進んで一日も早く支那古代文化の精華である周代の研究に入り、完璧を期せられんことを期待して紹介の筆をおく(松本信廣)。

Prehistoric Pottery in China, by
G. D. Wu (吳金鼎) London, 1938

山東城子崖遺蹟の發掘者たる著者が後中央研究院の殷虛其他の發掘に加はり、次いで英京に留學してイエッツ氏に師事し、支那先史時代の土器を綜合比較研究したるもの本書である。先づ土器發見の小史を述べ、之を北河南グループ(後岡、侯家莊、小屯等)、西河南グループ(仰韶村、秦王寨、池溝寨、不招寨等)、山東グループ(龍山、兩城等)、山西グループ(西陰村、荆村)、陝西グループ(鬲雞臺)、甘肅グループ(半山墓地、馬廠等)、滿洲グループ(沙鍋屯、單砬子、高麗寨)に分けて敘述し、色彩、形式、材料、厚

味、技工、表面、裝飾の七方面から分析し、各地域に於ける編年をうち建て、更にこの七地方群の特色を比較し西河南に於ては先史時代を通じ特色を呈したること、河南と山東に於ては黑色土器以降同じ特色の認められること、南滿洲に於ても或種の特質は黑色土器以降同様なることを述べ、各特質は時代により變化することを結論し、此等の研究を綜合して先史土器を六類に分け、更に土器研究の結果に準據して各遺跡の編年をうち建てんと試みてをる。ロンドン大學の學位論文なので多少讀みづらい點があるが此種の綜合的敘述は從來甚だ缺けてゐたので此點極めて興味多き著述である。たゞもし著者が陶片の化學的分析研究にまではいつてゐたならばもつと得る所多かつたらうと残念に思ふ。また南方に對しては僅かに杭州良渚鎮の遺跡が黑色土器を出だすことが知られてをるに過ぎず題名は「支那に於ける先史土器」とすべきよりも寧ろ「北支那に於ける先史土器」となすべきであつたらう。本書中最も精彩あるは土器製作の方法に對する著者の推定である。たゞし黑色土器の成因を著者は使用による黑色化とみとめるのはあまりに單純過ぎる見方であらう。全體的に支那の考古學の土器研究は今なほ甚だ幼稚な狀態にあり、之を急速に綜合し系統づけんとするよりも先づ個々の遺跡出土物の今少し正確な發表及びその集成と云ふ様な出版が望ましいと思ふ。それにつけても事變が支那考古學研究の諸事業を中絶せしめたことは極めて遺憾である(松本信廣)。